

「いのち」を守る十字架

土井健司

博覧強記の新約学者マルチン・ヘンゲルの書いた『十字架』（土岐政策・土岐健治訳、ヨルダン社、1983年）を読むと、イエスが蒙ったローマの十字架刑がどれほどひどい刑罰であったのかが分かる。数年前の映画「パッション」は、それを映像でわたしどもに見せてくれた。思い出す方も多いと思う。

ところで、一体いつから十字架がファッション・デザインになったのだろうか。十字架のペンダント、十字架のデザインをもった銀製の指輪、その他さまざまな十字架の形をしたものが巷にあふれている。しかし、そんなことは十字架が刑罰であった時代には考えられなかったはずである。

一体いつ頃からなのか。そこで、偶然見つけた資料をひとつ紹介したい。

四世紀ニュッサの司教グレゴリオスが書いたものに『マクリナ生涯』（残念ながら、まだ邦訳はない）というものがある。マクリナとはグレゴリオスの長姉の名であり、彼女は Cappadocia で女性の修道生活を創始した人物である。グレゴリオスはこの姉から人生を教わり、彼女を自らの「先生」と呼び慕っていた。この書物を読むと姉への愛情が伝わってくる。この書物の最後にマクリナの臨終、葬儀とその後について描いた箇所がある。そこに、亡くなったマクリナが身に付けていたものを記した行が見られた（第30章）。

マクリナのもとで修道生活を送っていたヴェティアナという女性が、亡くなったマクリナの首にネックレスがあることを見つける。そのネックレスはマクリナが肌身離さず付けていたものらしく、鉄製の十字架と指輪が付いていた。ネックレスから抜き取って、「彼女はわたしに鉄製の十字架と同じ材質の指輪を見せた」。そこでグレゴリオスは、これら姉の遺品を二人で分けようと提案し、御守りの十字架をヴェティアナに与え、グレゴリオスは小さい指輪を相続すると言う。その指輪にも十字架のしるしが彫られていた。ところが、ヴェティアナが手にとってよくよく指輪を見てみると、十字架のしるしのある指輪の台座の裏側にくぼみがあって、そこに「いのちの木の木片」が入っている。こうしてこの指輪は表の十字架のしるしと裏の木片の双方において「いのち」を示すものであったという。

おおよそこのような記事なのだが、ここで十字架は御守り（ピュラクテーリオン）と言われている。グレゴリオスが貰った指輪にも十字架のしるしが刻まれており、くわえて「いのちの木の木片」（創世記3章24節）も入っていて、いのちを示し、守ってくれるものであった。人に死をもたらす十字架が、反対にいのちをもたらすと言われている。もちろんイエスの十字架をもとにしている。

以上は、偶然見つけたささやかなテキストである。十字架のデザインの歴史についてはじっくり調べてみたい。だから最古かどうかは不明だが、少なくとも四世紀のマクリナはこれを肌身離さず身に付けていたという。そしてこの記事から推測するなら、十字架のしるしやデザインは、それを身につける人に「いのち」をもたらすというキリスト教信仰によって広がっていったように思われる。

いま病床に臥せる方のために、せめて心に十字を切り、その回復を祈りたい。